

泣きんぼうの話

小川未明

青空文庫

あるところに、毎日、よく泣く子がありました。その泣き様といったら、ひい、ひいといつて、耳がつんぽになりそうなばかりでなく、いまにも火が、あたりにつきそうにさえ思われるほです。

その近所の人々は、この子が泣くと、

「また、泣きんぼうが、泣きだしたぞ。ああたまらない。」といつて、まゆをひそめました。

「泣きんぼう」といえば、だれひとり、知らぬものがなかったほどでありました。

こんな泣きんぼうでも、おばあさんだけは、目に入るほど、かわいいとみえて、泣きんぼうの後から、どこへでもついて歩きました。

「いい子だから泣くでない。そんなに泣くと、血がみんな頭に上ってしまつて大毒だ。みなさんが、あれ、あんなに見て笑つていなさる……さあ、もう、いい子だから、泣かんでおくれ。」と、おばあさんだけはいいました。

そんな、やさしいことをいったくらいで、きく子ではありませんでした。

ある日のこと、往來の上で、なにか氣に入らないことがあつたとみえて、泣きんぼう

は、泣き出しました。おばあさんは、また、大きな声を出しては困ると思つたから、

「なにがそんなに気に入らなかつたのだ。いつておくれ、なんでもおまえの気に入るよう
にしてやるから。いい子だから、もう、そんなに大きな声を出して泣かないでおくれ。」
と、あとから、子供について歩いて、おばあさんは頼みました。

泣きんぼうは、やさしくいわれると、ますます体を揺すぶつて、空を向いて、両手を
だらりと垂れて、顔いっぱい大きな口を開けて泣き出しました。いがぐり頭を日にさら
しながら、涙は光つて、玉となつて日に焼けた顔の上を走りました。

白髪のおばあさんは、さしている日がさを地面に置いて、子供をすかしたり、なだめた
りしました。二人の立つている往來の空には、とんぼが、羽を輝かしながら飛んでいま
す。

「やだい。やだい。ひい——ひい。」と、子供はいつて、泣きました。

日盛りごろで、あたりは、しんとして、強い夏の日光が、木の葉や、草の葉の上にき
らきらときらめいているばかりでした。人々は、家の中で、昼寝でもしようと思つてい
るやさきなものですから、頭を枕からあげて口説きました。

「また、泣きんぼうが泣きだした。あんな、いやな子は、この世界じゅうさがしたつてな

い。」と、ののしつたものもあります。

「坊や、いい子だ。おばあさんが悪かったのだから、もう泣かんでおくれ。ほれ、ほれ、みんな出て坊やを見てたまげていなさる。あつちをごらん。」と、おばあさんは、子供の気をまぎらせようと苦心しました。けれど、子供は、泣きやみませんでした。

このとき、あちらの家から、だれか頭を出しました。

「あ、やかましくてしようがありませんね。泣かないようにしてください。」と、いいました。

「ほら、ごらん、やかましいとおつしやる。いい子だから泣くでない。」と、おばあさんは、しわの寄った額ぎわに汗を結んで、子供に頼むようにいいました。

すると子供は、かえってあちらの方を向いて、いまよりも、もっと大きな声を出して泣きました。どうして、こんなに大きな声が、こんな子供の体から出るだろうか、だれしもおも思わないものがなかったほどであります。

おばあさんは、孫の泣くのを見て、

「いまに、みんな血が頭に上ってしまつて、ガンといつて、頭がわれてしまうよ。」と、心配しました。

ひるね 昼寝をしようと思つて、家うちの中で、できなくてまゆをひそめているものは、いまにもあ
こえ 声から火ひが出て、あたりの家いえや、草くさや、木きに燃もえついて、空そらが真紅まっかになりはしないかと
おも 思つていたのです。

こま おばあさんは、ほんとうに困こまつてしまいました。ちょうど、そのとき、だれも通とおらない
おうらい 往來を、あちらから、男おとこが、自じてん転車しゃに乗のつてやってきました。

こども おばあさんは、子供をすかすために、

「もし、もし、この泣なく子こをつれていってください。」と、おばあさんはいいました。

「よしました。さんざ、あつちの野原のほらへいつて泣なくだ。」と、男おとこは、ひよいと泣なく子こを抱だき
あげると、おばあさんの止とめるまもなく、さつさと、あちらの野原のほらの方ほうへ走はしつていきまし
た。

おとこ 男は、自じてん転車しゃに、泣なきんぼうを乗のせて、広ひろい野原のほらの真ま中なかへつれていつて降おろしまし
た。

「さあ、ここであうんと泣なくんだ。そうしたら、黙だまるだろう。」と、男おとこはたつた独ひとり、子こ供ども
を野原のほらの真ま中なかに残のこして、自分じぶんは、自じてん転車しゃに乗のつて、また、どこへとなく走はしつていつて
しまいました。

子供は、野原の真ん中で、大きな声を出して泣きました。けれど、だれも、その泣き声を聞きつけるものはなかったのです。太陽と雲とが、この声を聞きつけて、びっくりしました。そして、じつと下を見つめていました。

「ああ、かわいそうに、あの子を花にしてやれ。」と、太陽は、独りでいいました。このとき、おばあさんが、とぼとぼと小径を探しながら、野原へ歩いてきました。

「あんなに、おばあさんが子供を探しています。子供が見つからなかったら、どんなににくでしよう。」と、雲は太陽に向かっていいました。

「あの老婆も花にしてやれ。」と、太陽はいいました。

子供と老婆が、二人とも村からいなくなつたので、人々は驚いて、方々を探しまわりました。けれど、ついに見当たらずにしまつたのです。そして、広い、広い、野原の中に、明るる日、一本の脊の高いひまわりの花と、一本のかわいらしい、ひなげしが咲いていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「時事新報」

1922（大正11）年8月16日

※表題は底本では、「泣《な》きんぼうの話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「泣きん坊の話」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

泣きんぼうの話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>